

\*

わたしがいま手がけている『記号空間論』という書物のなかでどういう仕事を果たそうとするつもりなのかについて、いまいちど突っ込んだ点検と自省を加えて洗いざらい報告しなおしておくがよからう。

まずさいしょに認めておいてもいいのは、わたし（も含めた人々）がたぶんずっと戦後世代としての規定を課せられてきており、また自らもその自覚によって仕事をしようとしている、ということだ。——と言っても、なにも「戦後世代でござい」のレッテルをいっも鼻先までぶら下げて歩いている、といういみじゃあない。むしろ、めいめいの感性の奥深い層のあいだに隠されている確信のようなものに近いはずである。わたしからみて、じぶん（も含めた人々）は明らかに、前の世代の人々とは違う。その前の世代とはもっと違っている。なとって、戦無派やらなにやら知らないが、近ごろの世代の居場所からはまた、ずいぶんと隔たっているようだ。このような異色の越えに、さまざまな折ふしわたしは衝きあたるのだが、それは、たんに「違う」という感觸からなるだけではなくて、それがそのまま世代的な反骨の核になることもありうるような、微妙な自己固定（自己肯定）の色あいを伴ったものだ。誰しも自分の世代を誇ってみせるのでなくて、どうしよう。冗談じゃあないよ、お前らたんに解るはずがあるかと、ときには唖咽をきってみせたりしたくなるほどの内実を、ともに生まれおち成熟し年経ていくこの一群の若らとのあいだに、たしかに共有していると言いきれなくて、どうしよう。むしろそれを探りあてる手続こそが、世代というものじゃあないか？（だから当然、ここで言う世代とは、風俗やありふれた年齢現象とは別の事柄である。）ひとが、世代のようなかたちでじぶんの足許と持ち場をはっきり照らしたることをせず、時代との交渉感覚を欠いたまま、たとえ互に舌口にしようとも、およそやぶ腹みのお喋りにしかなるはずはない。

さて、ある角度から切り抜いてみるならば、ここ向十年かにわたる世代の起

伏と、ひとが次第に一群の呪縛と虚遷から解きほなたれていく過程であったととらえることができるだろう。いまこれを大まかに、たとえば10年刻みにきりわけたとする。そのひと目盛りめ、1950年までには、戦後デモクラシーの衰衰が誰の目にも明らかなものとなっていた。合衆国の占領政策が手の平をかえしたように急転回して、それまではシャギすぎた手色いを痛い目にあわせた革命のことである。しかし狡猾な保守党は、中味のないこの鬼匠のもとに、安定した資本制的な政府を再建することに成功した。（その安定の秘訣は、資本制メカニズムと見えざる天皇制との合体にある。）1960年、日本革命を實現するためにはいちから前衛党をつくり直すわけがだめだと、誰しも考えるようになった。既存の党派が文藝の盛りあがりをおさえにかけ、その担い手でありえないことがはっきりしたからである。しかしその結果は、革命的な政治諸党派の乱立と抗争をまねいただけであった。なせなら、革命的な状態（とよべるもの）が存在しないところでは、革命そのものにしては理意か教条のなかにしかあるはずがなかったからである。どの党派もじぶんがたしかに「真正の」前衛党であることを弁証できなかったからである。のこされたのはせいぜい、武闘によって、他の諸党派を潰滅させることであつた。さうこうするうち、<sup>pax americana</sup>アメリカの平和の藝で日本経済はおどろくほどの膨脹をとげ、またたくまに、生活実質は窮迫からかけはなれたものになってしまふ。そして1970年、ひとはもはや前衛党がありうるとは信じなくなった。あるいは、前衛党が主導するような革命は願ひさげだとして、一切の党派を見限るようになったと言ってもいい。それゆえ、革命的な状態は無媒介に（いまただちに）實現されるはじめなければならぬことになる。しかしひとはもはや一切の政治戦略や実効的な組織-運動方針を喪ってしまったのだから、さうした昂揚ははじめについえる以外にない。そのととで、かつて予兆をしかなかつたもるもるの社会技術が、管理の網の目を張りめぐらしていく。いま、1980年には、語りうる一切の革命や理念というものが存在しなくなった。まったく「変な時代」だ。この世代は、なんの課題も持っていないようにみえる。（どこか否古典的な帝国主義が完成したようだ。）体制の与える現実はいくらみ切つて、在来の理論をのこらず非現実的なものにしてしまつていける。——こうして、寄せてはかえす幾世代にもわたる挑戦にたえ、戦後デモクラシーという意匠を支える体制の実質（身体と編

成する原理であるような天皇制と、その作動を通路づける資本制×カ＝ズムと、)はますますゆるぎないものとして露顕してきている。これを喰い破るだけの思想的・実践的な営みはついに現われていない。

わたしが大学とよばれる場所を息を吐いていたという気持は、ちょうど'70年をめぐる昂揚と騒乱のさなかにまでさかのぼる。わたしはやりたいうことをすべて実行した。ひとは東大解体などと叫んでいたが、じっさいこの手で潰せるものなら、左腕の一本ぐらひひきかえにしても惜しくなかった。しかしこの昂揚もやがて無様に終熄してゆく。これはいったい、何に敗れたのか？ たしかに後進隊や地区民に多度も蹴散らかされた覚えはある。しかし彼らを含めすべてを動かしていたのは、はるかに巨大で抗いがたい必然のようなものであったろう。そのまえでわたしはなす術もなく、ひとかけりの倫理をうけとっただけでまったくの無力であった。あえて語るとすれば、これは、無定型な安寧に取れたのだとでも言うしかあるまい。この無定型な安寧はいたるところ確実に瀰漫しつづけていたし、いまもそのまま居座っている。(無定型な安寧とは、たとえば、事態をほきりさせないという習性であってよいが、どう言ひたいかあるところがある。) )

こうしてわたしは、暗澹たる気分のうちに、大学院というところにすすんだ。暗澹たるいは、社会学を専らにするというわたしの選択に不都合なところがあったからではない。大学院という場所が、いまのべた無秩序な安寧をすまわせていたからである。このものの正体が何であるのか——それをつきとめることは(相手が無定型であるだけに)むずかしいが、それと明瞭に対峙してゆくことが、以来わたしの課題になっていると書いてよい。

わたしが社会学への志望を変えなかったのは、そこでわたしのなすべき仕事がいちおう遠望された(ると自分では勝手に思っ)ていたからである。ただ、この決勝点は、実感として捉まれているにすぎなかったから、それを具体的な構想へと肉付けする必要があった。そのために、'70年代の前半、わたしはさまざまの分野に手をこめた——まず、Lévi-Straussの構造人類学であり、ついで、近代経済学・数学・……であり、さらには言語学であり、等等。このリストからはただ通常の社会学だけが浅れおちているが、それはわたしが、いつのまに

か、この学科(の現状)に対して、いささか大きすぎる敵愾心を育ててしまっただせいでろう。わたしの関心は社会現象の全領域に及びものなのに、社会学はといえば、政治・法・経済・文学その他の諸領域から隔離し、それら領域で自生している個別諸科学と巧妙な棲みわけを行なう。たまた、じぶんのにのこされたゆずか居領分をとりしきること自足(自閉)しているようにしか見えなかった。何の用意もないままいきなりそこで交わっている論議に足を踏み入れたとすると、わたしもまたこの棲みわけに組みこまれてしまい、はやくも限局された関心と言説の処方箋を装うなければならぬことになるだろう。奇妙なことに社会学にもそれなりの、社会に關する一般理論と称するものがみつかるとは、たとはは経済学とほとんど何の連絡もなく、経済領域にかかわるゆれゆれの時代のもっとも先端的な学的達成からまったく影響を受けたいようなところで、どうしてそのような理論が自生することができるのだろうか？ ましてそれ以外の社会・人文諸科学のいとなみとなんらのつながりを断たないとしたら、社会学は社会の底にを解明しているのだろうか？ 社会諸科学がそれぞれ自生的に個別領域にたずさわっていて、結果として、社会現象の総体に関する行きとどいた知を誰も手にできないという——わたしが越えたいのは、社会学と社会諸科学のこうした現状である。そして、それ以外のことには、あまり興味がない。

1976年ごろから、それまで伸ばした触手の幾本かが次第に絡みあってきはじめたような感觸をえたので、わたしはぼつぼつ文章を書きだし、まもなく、そうしたもののまとまりをとりあえず「記号空間論」というタイトルのもとにまとめてみることはできるのではないかと、考えるようになった。この仕事は、わたしの模索の最初の結果となるはずのもので、いわゆる<言語>派社会学の立場を鮮明にかかげる理論書である。

<言語>派社会学とのべたが、これはどういうものか？ 基本的に言って、ここにはわたしの人間理解が色濃く投影されている。わたしは選挙で投票をしたことがないが、その理由を友人に話しげにたずねられたとき、戯れにわたしは、「だってアキズムの政見がないのだから投票しようがないじゃないか」と応えてしまったものだ。しかし、これは冗談じゃなく割に本気のようなところがある。これほど深く権力に加担させられて(加担して)いるというのに、

このうえいったい向をすることがあろう。——こうした自分の信条をのべるといふことにすれば、アナキズムを担いぬいわけにはいかないようである。といってもむしろ、体系的な政治信条のことをさしているわけではない。アナキズムの政党などありうるはずもなく、いわば、不可能な政治的実践や運動形態の象徴として言及されただけなのだから。伝えたいことはこうである、要するに人間は自分のことは自分でできるんだ、〈言語〉があるんだ、もうそれで十分にやっていけるんだから、それ以上の外的強制力や権力や、共同體的な規制や向やかやは要らないんだ、そうした余計なものにあれこれ口を挟まれる筋合いはないんだ、ということ。こうした人間の尊厳への基本的な信頼のようなものが、わたしの仕事を底から支えている。ここからわたしは、〈言語〉のような人間に固有の活動形態に注目することになるのだが、このような試みはどうかやら、現在の社会学がもっているような実証観と正面からぶつかってしまおうものらしい。それゆえわたしはじぶんのやり方を、ひとつの(客観的な)立場へと高める必要があったのである。

『記号空間論』によってどうしても遂行しておきたい理論的な作業の眺め目として、つぎの3つがある：

- ① 資本制を解体すること。——経済秩序の資本制的な編制一般のなりたちを解明すること。社会主義諸国家の体制をその亜種として固定すること。資本制機構の運行則を記号論的に解読し、資本制空間を身体の監視機構として暴きだすこと。戦後日本の資本制(見えぬ天皇制)を訓換すること。
- ② マルクス主義を撲滅すること。——資本制空間から身体を救済するとの掲げであったマルクス主義の言説に、失効を宣告すること。人々を、一時代の設けた希望の檻から脱出させること。マルクス主義的政治スランを掲げる指掌派に、引導をわたすこと。
- ③ 文明の形態等と成敗すること。——表現の諸々の現象形態を精査し、記号的生を形式的に記述すること。人間性の外敵基準を与え、記号空間としての社会にかかわる倫理思想を準備すること。脱資本制的な社会の具体像をなるべく詳細に描述し、資本制空間の現状からそこへ至る移行可能性を追究すること。

このような企図を実現するはずの社会理論を、わたしは書きあげたい。

もちろんわたしは、自分の能力などにはお預けなしに、ことを目論んでしまっている。『記号空間論』とは、ほとんどありえないような書物の名称でもあるのだ。しかし、誰しも自分でただやすやすと書きうるものばかりを書きとめることのなかに、果たしてどれほどのいみがあるのか？ 書く値うちのある事柄は、つねに書きえぬものの側にある。自分があらゆるさなけいばならないものと、現に手許にあるありあゆみの才能や素材とのあいだで、その懸隔を埋めようと火焙りにも似た苛烈な日常にたえること、それが表現直ひとり残らずの産業にまらがない。表現、この無謀な意志には、まったく拠りどころがないようにみえる。しかし、われわれが見聞きしうる表現はのこらば、現にこのような不可能へ向けての跳躍を経てきたものばかりであるのだ。たとえば、これまでわたしの書いてきたもののどれひとつにもせよ、当初は書けるはずのなかった事柄を結局は書いてしまっているような箇所を、かならず含んでいることがある。(そのことのために、あえて書いていると言ってよい。) 二のような僥倖のおとずれをさしあたりただひとつの頼みとして、わたしはわたしの企図を実現にうつすほか仕方ないだろう。しかもここは、ことばにいたさかの権威も認めようとはしない土地柄である。前途は幾重にも多難であるが、進めるところまで進むだけである。

わたしは、人類のこの現状に対してちっとも責任を負う必要を認めないが、その将来についてであれば、最大限の責任を有するものと考えている。『記号空間論』が描きだそうとするのは、21世紀にわれわれ人類を見舞うことになるはずの、諸々の困難であり、その解決の方途である。資本制産業社会は、すでに200余年の歴史をもち、多少のかがりはみえるもののここ暫らくは拡大をっけるであろう。しかし、その先、つぎの本当の曲り角はどのようにあらわれるであろうか？ 21世紀における資本制の軌跡と、それが必然によっておちやく先を、わたしは問題にしたいのだ。

#### 訂正

論文「構造人類学の方法」(CN83)の文献中、末尾から2番目に1978「規範形成過程に関するノート」とある論文の筆名を、盛山和夫と記すべきところ、誤って碓線にしてしまいました。お詫びします。

ところで、このような西欧近代を丸のまま問いかえすような作業が、この百年間独創のかけらも花開いたことのないような土地柄の場所で、根を下ろし実を結ぶことができるのだろうか？ いうまでもなくこれははなはだ望み薄ではあるが、考えようによってはいささか望みのないところでもなさそうに思われる。まず第一に、日本は当の西欧の辺境中の辺境であり、あらゆる奥性の吹き寄せ場である。ある没落にそのいみとあてがい、有効な見通しを与えるのは、しばしばその没落の眉睫に位置する人々であるから。第2には、日本にはいかなる神も住まわぬことである。この中心を欠いた相対的精神が、もし理性的にふるまうことをするなら、それはこの没落に立ちあうにふさわしい文体を編み出すかもしれない。

\*\*

このようにして、わたしはこれまで、20あまりの草稿をまとめてきたが、これで『記号空間論』の大体  $\frac{1}{2}$  ぐらいのところではないかと思う。もちろんこの進捗状況は、はじめのころ予想していたペースから相当遅れてしまっており、ちょっと話にならない。書きかけの草稿や手をつけたまま仕上がっていない仕事にしても、机のまわりには山積みになっている。それで、これからの作業のすすめ方であるが、

a) 従来どおりの仕方、草稿を順次に、アラン全体が埋めつくされるまで数きつめていく、

b) とにかくただちに出版用の原稿を書きおろしにばかり、必要な箇所がみつかった場合に気づって草稿から準備する、

の2通りがありうるだろう。ともに難点があ、て、a)では時間がかかりすぎてしまうし、b)の従成法では構成や内容の緊密さがとておられるとしてもどうしようもない。そこであれこれ思案してみたすえ、いまのところはつぎのようしようとおもっている、すなわち、a)の作業はまだ必要であるけれども、b)の作業からのイムパクトも不問になりはじめたので、いうなればa)とb)との中間をとり、原稿を執筆するための下図にするための、論理(論旨)構成の青写真をそろそろまとめにかかるとする。この作業をa)と並行してすすめておくことが、もっとも現実的な仕事運びだと思ふ。

前号ののちまとめたものなどは、つぎの通り。

- CN 83 「構造人類学の方法」 ¥100 : Lévi-Strauss における〈構造〉と〈変換〉を論ずる。  
 CN 84 「個身体的作用力論」 ¥170 : 「記号空間=社会」の続稿  
 CN 85 「言語ゲーム論・準備ノート」 ¥25 : Wittgenstein 「確定性の問題」について  
 CN 86 「きれいな複写原稿のつくり方」 ¥15 : 小室セミナー用。  
 CN 87 「統計学を習うひとのための 積分演習」 ¥110 : 小室セミナー統計コース用  
 CN 88 「統計学を習うひとのための 確率型数学はやわかり」 ¥35 : 小室セミナー統計コース用  
 CN 79 「生命科学と女性の権利」 『女性の社会問題研究報告集』第3集 ¥300  
 CN 80 「「キンパンジャーは語る」か」 『止境』31号 ¥550 : リンデン『キンパンジャーは語る』の書評論文。

いずれも、入手希望や追加註文あり次第お届ける。

\*\* \*\*

さいごにお断わりしておけば、前回「月報」を出してから、あまりにも間が空いてしまった。お断り下さった方がいら、しゃれば、お詫びする。いくらなんでも、こういうことでは「月報」と銘うつのモ気がひけるが、致し方ない。「月報」というのは、わたしからすると、あくまでモサーヴィスのためのものである。だから、メインの仕事が「入れば」、いくらでもあとに回される。(だからといって、手を取って置くわけではないから、念のため。) 秤量はいくらあっても、まとめるのにかかる手間ひまが惜しまれるときが多いのは、仕方ない。今号にも、執せるつもりでいて余したことがいろいろあるが、すべて次号以降に持ちこしとする。「月報15」は近く、3月はじめにも仕上げるつもりであるが、そのあとはまたおれほど間をあけるかわからない。

\* 今号の記事は、昨1979年10月19日、言語研究会で口頭報告した内容をもとにしてます。

\*\* 『止境』という雑誌には今後しばらくわたしの書くものがあつてほしいです。わたしと契約している方で、

この雑誌を送ってもらっては不都合だという方は、どうか当方までおしらせ下さい。

HASHIZUME, Daisaburo : 5-9-11 Zaimokuza, Kamakura 248

0467-22-1030 #YOKOHAMA 51782 CN 99 ¥20.-/8 pages